

・白選五十一首・



尾崎左永子

おざき・さえこ 1927年、東京生まれ。東京女子大在学中に佐藤佐太郎に師事。'57年『さるびあ街』で日本歌人クラブ優秀歌集賞受賞。一時、歌壇を離れ放送作家、作詞家として活動するが、83年復帰。『春雪ふたたび』『夕霧峠』（遼空賞）などの歌集があり、古典文学の著書も多い。01年「星座一歌とことば」創刊。

『さるびあ街』

あらあらしき春の疾風や夜白く辛夷のつぼみふくらみぬべし
年を経て相逢ふことのもしあらば語る言葉もうつくしからん

反響のなき草原に佇つごときかかる明るさを孤独といふや

遠くにて消防車あつまりゆく響き寂しき夜の音と思ひき

硝子戸の中に対称の世界ありそこにも吾は憂鬱に佇つ

冬の蓐匙に庄しをり別離よりつづきて永きわが孤りの喪

菜の花の荅つぶしるつ吾かつてひたむきに人を愛せしや

氷雨ふる街より入りし地下道に雫売られるて夜のその声

わが髪に触れんあたたかき巨き掌を思ひつ人を恋ふにあらねど

人おのおの生きて苦しむさもあらばあれ絢爛として生きんとぞ思ふ

五月は喪服の季節といへり新緑の駅舎出づればまぶしき真昼

『彩紅帖』

『二十代の青春の墓碑銘』と自ら記した『さるびあ街』（松田さえこ名）を刊行したのは二十八歳。私の歌集は一生にこの一冊だけと決めていて、二度と歌集を出すつもりはなかった。短歌と散文が両立するとはとても思えなかったし、両方を目指すのは短歌に対して申し訳ない気がしていた。それに、過去の己れと訣別する決意も固かった。若さというものには、他人の立ち入れない一途さがあると、今になって思う。

紆余曲折ののち、再び短歌に還つて来た。

『さるびあ街』がじつに三十二年ぶりに再刊され、著者名も「尾崎左永子」に改めた。次いで『土曜日の歌集』、遅れて『彩紅帖』が、短歌中断以前の作を集めて刊行された。すで

夕映を曳きつつ帰り来しごととき夫を迎ふる吾と幼な子

高層の街に月明しことごとく窓は眼窩となりて犇めく

石垣に茅花光りて風ありき父ありき東京にわれは育ちき

透きとほる花の幻影夜々に眠りをつつむ立春前後

わが未来まだ闘ひの匂ひして標的とならん誰と誰と誰

ふりやまぬ薄くれなるの花片々確かめがたき時のかけ積む

いざさらば炎のごとく生きんかな誰がためにあらずひとりわがため

液体のやうに滴る光ともみえつつ海に夕日落ちゆく

驕り易くかつ若くして或る時は甘美に見えき死といふことも

訪れんわが終の時ねがはくは淨くしあれよバリアの白

とめどなくさくらふふけり今われはなさねばならぬこと負ひて生く

たまきはる内の光を明かすごとひらく椿の花のしろたへ

夕光の舗道動きゆくわが影が壁に当りていま立ちあがる

足早に駆けぬけしわが三十代聖橋散る枯葉ボブ・ディランなど

遠ざかりゆく戦旗など夕映ゆるさまにか似たりわが青春は

落日を送る岬の夕風に聴こゆ万騎の疾走のおと

空を背に臘梅咲けり目に見えぬ標あるごととき花の空間

足らざるを補ふごとく街の上夕べふたたび春の雪ふる

その胎に花抱くべき季の来て少女子の肌桃李のごとし

吹かれるる彗星の尾の悽愴も遠く朧ろに見ればはかなし

「土曜日の歌集」

「炎型」

「春雪ふたたび」

「夕霧峠」

に一部が「土曜日の歌集」の巻頭にいくらか入っていたせいもあり、「彩紅帖」はあまり人目をひかなかつたが、私自身はこの歌集が好きである。大西民子、馬場あき子らと競詠した「彩——女流五人」の作品もここに収録してある。青年歌人会議時代の、熱い思いがいっぱい詰まっている。今回は作歌流年順に「彩紅帖」を第一歌集に据えた。このあとに十五年余の空白期があった。

時の流れは速い。たちまち時が来、時が去り、歌集は八冊になり、ほかに選集「鎌倉もだあん」（一九九四年）が残った。

再び歌壇に戻ったころ、「さるびあ街」の「松田さえこ」のイメージがそのまま残っていて、同じタイプの歌を求められるのに苦慮した時期があった。時と共に人間も歌も変わるが、読み手はなかなかイメージを変えてくれない。今回選歌していて、自分の思い入れの深い作と、読者の評価の高い作の間に、微妙なズレがあるのにも改めて気付いた。難しい問題である。

私自身は、緊張感の持続のある「星座空間」に最も思い入れが深いのだが、追空賞の「夕霧峠」のほうが読みやすいという人も多い。

今後の展開がどうなるのか、読者よりも作者のほうがちよっぴりたのしんでいるフシもある。

子守唄聴かせし日すでに遠くして子は冬の帆を操りゆけり
うそ鳥は核のつぼみ喰むといふわれは菜の花の色若き喰む
姨捨の姨の心は人しれず和ぎあるべし冬夜思へば

雨の日のさくらはうすき花びらを傘に置き地に置き記憶にも置く

夜のふけに犬は鎖の音ひきて眠りのかたち選びるらし

秋草の花みな濡れて霧になびく夕霧峠といふ道をこゆ

地にもどる掟拒みて曇天の野茨の実は冬を越えたり

回想を求められをり人の生に言ひ遺すものありや あらずも

あぶら葉に似る黄の花を踏みしだきわれは天空の下の一点

手を拍てば花の闇より反りくるこだま縹渺と身を包みゆく

終戦の日の暑かりし曇り空わが十七歳は透く翅に似る

「星座空間」

箱の闇に蔵はれてゆく雛人形の視線遮り紙巻き了へつ

時来れば地に伏せて紅き落椿いのちのなげき人に聞こゆな

残雪の富士の片身が昏れてゆく車窓に渾身の一日が終る

いましめを解かるることく傾ける日が高層の上にかがよふ

ここに咲きまたここに散る夏萩のごとき一生を悔いざれよゆめ

鳥瞰図のごとき既視感ありありと立ちて真冬の墳丘の上

公園の形式としてブランコがまひる人無く日を浴びてゐる

とげとげとしてぬくみある夕日にて風の荒れたる一日しづまる

「夏空前後」